

自然は大切とわかっていても

二年生と一緒に郡上研修に行きました。日帰りの日程でしたが、私にとっては印象に残ることがたくさんありました。二年生たちの姿もその一つです。先日三年生同様すばらしいものでした。感染症対策、時間行動、礼儀マナーなどにおいて、引率責任者として安心していられました。とても気もちのよい日帰り旅となりました。郡上という土地には、ある用事で何度か足を運んだことがありますが。しかし、その時には同じ場所を訪れるだけで、私は郡上について何もわかっていなかったと今回反省しました。やはり「ところ変われば」です。瑞浪とは違うよさが、郡上にはありました。

あって当たり前の「水」。この水に対する郡上の人びとの思いがいろいろなどころにあふれていました。昨日訪れた「あゆパーク」もその一つです。施設の名称になってるので、清流に生きる鮎あゆで町おこしをしているのだと単純に考えていたのですが、そんな単純なものではありませんでした。

郡上の人びとは、鮎という自然の生き物を大切にしています。しかし、それを生活の糧にしているだけではありません。彼らの大切にしていてる大本は、命の源である水なのだとしみじみ感じました。鮎はそのきれいな水の中に生きる生き物の一つに過ぎないのです。観光や商売のために、鮎にスポットライトを当てているのではなく、きれいな水の象徴である鮎を大切にすることで、それが生息する水を守っているのです。天然の鮎が遡上さうじょうするという事実が郡上の財産であり、それを育む水を住民が守り続けていることに、私は感動しました。

郡上の街の中でも、水を守っている人々の息づかいを至る所で感じました。街中を走る水路の水の美しさ。その水を飲料や洗い物等に段階的に利用してむだにしない人々の熱い思い。郡上の人々にとつての水は、浄化された水道水ではなく、自然の恵みとしての天然水ののだと言えるでしょう。

定町時代の旅の詩人（連歌師れんがし）である飯尾宗祇いらい そうぎがほとりに庵いおり（粗末な家）を結んだ（建てて住んだ）という湧き水（宗祇水）を見学していた折、下校途中の地元の五、六名の小学生が、私の方にやってきました。彼らは私の姿を見つけると、「こんにちは！」と全員が何のためらいもなく元気にあいさつをしていききました。水を守ることが、純粋な心も育むものだと感じました。

私たちが住む瑞浪にも、いくつかの川がありまます。自然は大切にしなければならぬとわかっていても、なかなか実行に移せないものです。瑞浪の自然を愛する者として、少しでも郡上の人々を見習いたいと思った旅でした。

（十一月二十九日 記）

